

研究分野		授業科目名		科目責任者
組織培養・免疫系分野		周産期・生殖・腫瘍免疫学研究		下屋 浩一郎
開講年次	共通／専攻／選択		単位数	
1～4	必須専攻		20	
目的				
(1) 産婦人科領域の様々な病態における免疫の関与について習得するために免疫学的基礎を理解する。 (2) 免疫学的理解を基礎として内分泌学的、分子遺伝学的解析手法についても習得する。 (3) 免疫学的手法および内分泌学的、分子遺伝学的解析手法を理解して周産期・生殖・婦人科腫瘍における病態解析を遂行できる能力を修得する。 (4) 周産期・生殖・婦人科腫瘍における臨床的・基礎的検討において統計学的手法を修得する。				
授業到達目標				
(1) 周産期・生殖・婦人科腫瘍領域の病態における免疫学的関与について説明できる。 (2) 免疫学的手法および内分泌学的、分子遺伝学的解析手法を用いて周産期・生殖・婦人科腫瘍領域の種々な疾患の病態解析ができる。 (3) 臨床領域における技術を応用して、周産期・生殖・婦人科腫瘍領域の病態の解析ができる。 (4) 周産期・生殖・婦人科腫瘍における臨床的・基礎的検討において統計学的手法を用いた解析ができる。				
授業計画				
月日	曜日	時間	担当者	授業内容
毎月	第1水	17:00 - 19:00	中村 隆文	婦人科腫瘍における免疫学的変化について
毎月	第3水	17:00 - 19:00	下屋 浩一郎	周産期・生殖・婦人科腫瘍領域における免疫学的関与について
毎月	第4水	17:00 - 19:00	石田 剛	胎児の脳発生における免疫学的解析について
毎月	第1木	17:00 - 19:00	杉原 弥香	臨床データを用いた統計学的解析について
評価方法				
(1) 1・2年次に中間発表へ出席する。 (2) 2年次に中間発表で発表する。 (3) APRIN e-ラーニングプログラム (eAPRIN) の必須単元を受講する。[受講期間：1年次に受講。] (4) 1週間ごとに実験内容を履修手帳にまとめ、科目責任者の認定印をもらい、学期ごとに提出する。				
課題 (レポート等) に対するフィードバック				
(1) 2週間ごとの実験内容報告に対し、指導・助言を行う。 (2) 中間発表の抄録作成時に、指導・助言を行う。				
教科書				
ISBN-9781259644320, Williams obstetrics, [edited by] F. Gary Cunningham ... [et al.], McGraw-Hill Education, 2018 ISBN-9781496380333, Berek & Novak's gynecology, [edited by] Jonathan S. Berek ; editorial assistant and design, Deborah L. Berek, Wolters Kluwer, 2020 ISBN-9780071442015, Fetology : diagnosis and management of the fetal patient (2nd Edition), Diana W. Bianchi, et al., McGraw-Hill Education / Medical, 2010				
参考書				
ISBN-9784897069265, マウス・ラット実験ノート：はじめての取り扱い、飼育法から投与、解剖、分子生物学的手法まで<無敵のバイオテクニカルシリーズ>, 中釜齊, 庫本高志, 北田一博 (編集), 羊土社, 2009 ISBN-9784897069203, イラストでみる超基本バイオ実験ノート：ぜひ覚えておきたい分子生物学実験の準備と基本操作, 田村隆明, 羊土社, 2005 ISBN-9784897069272/9784897069289, 遺伝子工学実験ノート<上/下> (改訂第3版), 田村隆明 (編集), 羊土社, 2009				
準備学習 (予習・復習等)				
(1) 実験前に、教科書・参考書等を読み、約1時間程度の予習を行う。 (2) 毎週、履修手帳に実験計画・内容を簡潔に記載する。 (3) 実験終了後、その日のうちにデータを記録し、提出する。				
修了認定・学位授与の方針と当該授業科目の関連				
(1) 研究計画の立案から検証に至るまでの科学的方法論・思考法を修得している。 (2) 卓越した研究成果をあげ、産婦人科学の深い学識を獲得する。 (3) 学術研究が国民からの信頼、負託に応えるものであることを理解し、高い倫理観を身につける。				
注意事項・メッセージ				
(1) 大学院生として、産婦人科学の勉強、実験に熱心に取り組んでください。 (2) 今回の研究結果が臨床応用可能となることが望まれます。				